

野球部、甲子園への切符を手にする。

本校野球部の創設は、終戦翌年の昭和21年であった。  
復活した全国中等野球大会の県予選が行われることになり、それに出場しようと5年の山崎・小泉らを中心に集まった同好者が野球部を結成した。  
この県予選では、いきなり優勝候補の盛岡中学とぶつかり、残念をがら8 - 0のスコアで敗れている。

その後、用具不足や練習場難などの多くの悪条件と戦いながらも、  
「試合に泣かずして練習に泣け」を合言葉に、年々きびしい練習を重ね、試合出場回数をふやして行った。その結果、26年には夏の全国高校野球大会県予選で2位となり、奥羽大会への出場権を得た。また秋季高校野球県大会で初の優勝をとげ、東北大会では決勝まで進出して2位となった。  
この年は、投手の小武方の活躍が光っていた。さらに27年は、春季高校野球県大会優勝と、次第に岩高野球部の名声が高まっていった。

このように諸先輩の努力が土台となって、昭和30年の甲子園出場が実現したのである。  
これは単に、野球部創設10年目の快挙というだけにとどまらず、本校創立以来、もっとも全校生の志気をふるい立たせたできごとだった。そのときのメンバーは、村川（投手）、田中（捕手・主将）名久井（一塁）、平野（二塁）、板垣（三塁）、小泉（遊撃）、佐々木（左翼）、田口（中堅）沢野（右翼）の諸君で、部長が戸嶋正夫、監督が川村昌司であった。

当時、夏の甲子園大会には現在のような1県1代表制が採られておらず、全国から23校、北東北では秋田・青森・岩手の3県からただ1校だけが奥羽代表として出場できるにすぎなかった。  
甲子園出場は現在より遥かに "狭き門" だったのだ。

昭和30年の3月、高田市での合宿を皮切りに野球部の春期練習が始まった。  
技術的な基礎訓練と精神面での団結力強化がその主要な目標とされた。  
県予選を控えて、岩高野球部の前評判はけっして高くなかった。  
そして5月に開かれた東北6県大会盛岡予選にのぞんだが、このときは1回戦に盛岡一高と対戦し、8 - 3の戦績で敗退した。

だが選手たちは夏の大会に希望をつをぎ、苦しい練習にはげむのだった。  
野球部の最大のなやみは、球場が無いことである。校庭は週に3日しか使うことができず、あとは市営・盛鉄・岩大の球場を借りてどうにか間に合わせた。この3球場は、1週間も前から予約しをしなければならない。三球場が使いをいときは、河北小学校のすみを借りてバント練習をしたり、外の部が帰ってから校庭でバッティング練習をするという状態であった。  
精神的にハングリーな環境下での、苦しく厳しい練習の成果を発揮しようという気迫だけではどのチームにも負けなかった。

全国大会岩手県予選に先立ち、最後の仕上げのため、一週間の合宿に入った。練習は加賀野中学校の校庭を借り、本校寄宿舎に寝泊りした。この中学校のグラウンドはレフト方面が非常にせまく、少し大きく打つと球が田に飛び込んでしまった。だが選手たちはそんなことを苦にせず、ファイトある

練習を行なった。

この合宿のころから、田中、村川、板垣、田口、小泉をどの諸選手が本来の当りを取りもどしてきた。そして、調子が上向きになったときに、全国高校野球選手権大会の岩手県予選を迎えた。

## 岩手県大会

県予選が始まると、つねに6分4分で劣勢の予想にもかかわらず、一関二高、黒沢尻北高、花巻北高をそれぞれ破り、奥羽大会への出場権を獲得した。

軟投派・村川の沈む球が冴え、相手打線の打球はほとんどゴロになった。ピンチをことごとく併殺で切り抜けた。セカンドの平野は、1試合に少なくても4回、多いときには6回もダブルプレーを成立させている。わりとエラーが少なかったのは、岩高グラウンドのお蔭だった。石ころだらけでよくイレギュラーし、油断をすればすぐにケガをする。自然と打球に対する集中力が養われた。ましてや、よく整備された市営球場のグラウンドでは、イレギュラーバウンドなどまず起こらず、安心して守れた。

村川の家は商店を営んでいた。店が忙しくて球場へ応援に行けないお母さんは、試合が始まるとラジオの前に座って、ラジオに向かって呼びかけていた。

「おめはんいい球投げるんだんちエ」

「打っておぐれやア」

「第一おめはんのために負けだと言われねアよにしておぐれやア」と。

村川の1投1打には、母親の温かい、しかも必死の祈りがこめられていた。村川に限らず、そして昔も今も変わらず、この心情は我が子、我が兄弟を選手にもつ誰もが共通に抱くものであろう。バッターボックスに立ったときも、選手1人が打っているのではなく、家族も一緒になって闘志を燃やしていたのである。それは、選手の家族にとどまらず、本校関係者全員の気持ちでもあった。

こうなると、試合がそのまま練習の役割を果たし、チームは尻上がりに好調となった。準決勝で戸高を14 - 9としりぞけ、決勝では優勝候補の宮古高を相手に対して、2 - 0で勝利し見事県大会優勝をなしとげたのである。

## 奥羽大会

続く奥羽大会は、県大会の1週間後の7月31日から、盛岡市営球場で開始された。本校選手は岩手県の名譽にかけて、学生として恥じない戦いをする覚悟でのぞんだ。1回戦の準々決勝の相手は、実力本大会随一と評されていた秋田高だったが、岩手高ナインはよく石桜精神の真価を発揮し、4 - 0で完勝を収めた。2回戦の準決勝は、県大会で顔を合わせた戸高とふたたび対戦し、4 - 0でこれを降した。

そして、ついに奥羽大会の決勝戦に進出した。

決勝の相手は強豪の八戸高。八戸高を5 - 3で破って、念願の甲子園への道を開いた。ファースト名久井がウイニングボールをキャッチした瞬間、つまり甲子園出場が決定した瞬間、キャプテンの田中は思わずキャッチャーマスタを投げ上げた。

スタンドの応援団も歓喜に包まれた。  
ある老先輩は「開校以来、これ以上の感激はない！」と絶叫した。

勝利のグラウンド一周のあいだに、平野の胸には感激とともに不安も湧いてきた。ここ何年か、東北の代表は甲子園の一回戦で惨敗して帰ってきていたからだ。「オラだぞ一体なんじよなるべ」と平野は沢野と話した。

球場からは同窓会が手配したオープンカー乗って市内をパレードした。オープンカーにのるとき、女の子から人形を差し出されて小泉は戸惑った。どうしようかと思っていたら、戸嶋部長が「もらっておけ」と言ってくれたのをはっきりと覚えている。その戸嶋先生も、いまは亡い。

優勝パレードの先頭車には山中校長が乗り、生徒の自転車隊がナインに続いた。沿道の建物からは紙吹雪が舞い、もう甲子園で勝ったような騒ぎだった。

みな市民の好意が身にしみてジーンときた。  
夢心地だったせいか、田中にはパレードのときの記憶があまりない。  
先生から挨拶の要領を教えられたが、どうもウロ覚えだった。  
入院中の父親に勝利を報告し、家に帰ったら近所の人達が祝勝会を開いてくれた。  
嬉しかった。だんだんと優勝の実感が湧いていた。

## 甲子園大会

奥羽大会での優勝の喜びをじっくり味わうひまもをく、8月5日に盛岡を出発した選手たちは、7日に甲子園の土を踏んで初練習を行なった。翌8日には、一回戦の相手が神奈川代表の法政二高と決まった。

そして、8月10日の開会式がやってきた。  
新宮高に続いて17番目に入場した本校選手の顔は、誇らかな表情で輝いていた。  
入場式が終り、第一試合の静岡高対城東高戦が行われたあと、

### 一回戦 岩手高校対法政二校

いよいよ岩手高対法政二高の対戦となった。  
新聞は、7分3分で法政二高の有利を予想し報じていたが、不利な予想をくつがえして勝つというが県予選以来のならわしになっていたのも、選手たちは少しも動じなかったが相手の実力については

皆目見当がつかなかった。正直に言えば、負けるにしてもあまり恥ずかしくないスコアで、と思うところもあった。

守りについた1回表、相手のトップバッタはショートの吉沢。彼は法政二高のキャプテンであり、開会式では選手宣誓も務めていた。その吉沢を、村川は三振に討ち取った。これで相手に対する恐怖感は消えた。

1回裏に岩高は先取点を挙げ、3回、5回と得点を重ねた。3対0のシャットアウト勝ちだった。

村川の好投と田中の闘志、板垣の好打、さらに内外野が一丸となった好守で、強敵を打ち破ったのである。

## 二回戦

### 岩手高校対坂出商高

こうして岩高は2回戦に進み、北四国代表坂出商高と対戦することになった。

大会5日目の8月14日、その岩手高対坂出商高の熱戦がくり広げられた。

坂出商業を相手にしての2回戦は雰囲気はぜんぜん違っていた。新聞の予想は五分五分と出た。相手投手の情報なども入った。

だが、いざバッターボックスに立ってみると、軟投派と聞いていたピッチャーから今まで見たこともないような豪速球が投げ込まれてきた。

一点を先行されての五回、岩高は小泉のレフト前ヒットを生かし、村川のショート右を抜くヒットによって同点としたが、7回に致命的な2点を奪われ、善戦空しく3対1で敗退した。

選手たちの目に悔し涙が光った。

しかし誰が彼らを責めるだろうか。

晴れの甲子園大会に出場し、堂々一回戦を突破したのである。

すでに校史に不滅の金字塔を打ち立てたのだ。

さらに言うなら、岩高が3対1と迫った坂出商業は後の試合を勝ち進み、この大会の準優勝に輝いたのであった。

在校生、職員、父母、卒業生……母校関係者のすべてが、これほどひとつになったことはかった。また盛岡市民や岩手県民も、岩高チームの健闘を讃えた。

岩手に岩手高ありと天下に知れ渡ったのであるから、誰もが母校に限りない誇りを抱いた。まさに石桜精神の開花であり、母校の雄躍期を端的に象徴する出来事であった。あのときの精神的な高まりを、われわれはいつまでも大切にしたいものである。

そしていつの日か、あの感激をふたたび味わいたいものだ。

岩手高校野球部の甲子園出場に関して、ぜひふれておかなければならないのは、選手たちの活躍を物心両面から支えた多くの関係者たちの、みごとな協力ぶりである。

まず三田理事長は、遠征資金として20万円の私財を寄せ、岩高チームを励ました。

また石桜同窓会も寄付を集め、金銭的精神的に母校野球部を盛り立てた。ことにも、当時同窓会副会長だった栃内松四郎の奮闘ぶりはめざましく、募金のあと選手たちとともに甲子園入りをし、何くれと世話をするなどの熟の入れようであった。

石桜同窓会そのものとしても、母校野球部の快挙を全面的に応援したのが、最初の大事業だったといえる。こうして、母校関係者のすべてが、かつてないほど緊密に結集した。

野球部の甲子園出場に関しては、後日談も豊富である。大宮市在住のある画家から、油絵「花と少女」や色紙を贈られたのもその一つだった。フジバヤシ・サイカンというこの画家は高校野球の熱烈なファンで、毎年心を打たれた出場校に作品を寄贈することにしているのだった。昭和30年、の甲子園出場校の中では、岩手高校と熊本高校の健闘ぶりに感動したという。画伯からの手紙に、つぎのようなくだりがある。

「（前略） 岩手高校には立派な品格がありましたので動かされました。  
（中略）勝つ負けるは別です。甲子園へ出てくるもの23、ことごとく紙一重のちがいです。運不運によってキマル勝負です。勝っても負けても同じことです。人間のイノチの光りあるのみです。岩手、熊本、新庄、芦別、四日市などなら、ボク一生涯ついてゆかれると思う学校です。校風です。（後略）」サイカン画伯から贈られた油絵「花と少女」はいまも校長室の壁を飾り、岩高チームの活躍を思い起こすよすがになっている。

石桜50年史、石桜70年誌より引用しました。